

「エスカレーター片側空け」における多元的無知の検証*

井上 良依^a 森 知晴^b

要約

日本では、「エスカレーター片側空け」という暗黙のルールが存在する。しかし、事故のリスクや輸送効率、一部の人が安心して利用できない、といった様々な問題がある。近年、歩行を抑制するためのキャンペーンや条例が施行されているが、持続した行動変容は見られていない。もし「エスカレーター片側空け」について多元的無知が存在するのであれば、その是正が、集団の行動変容につながる可能性があると考えた。本研究では「エスカレーター片側空け」における「歩行禁止」「両側利用」「規範逸脱者への違和感」の信念について、多元的無知を把握するため、「ズレの知覚」「誤知覚」が存在するか検証を行った。結果、「立ち止まって利用すべき」「誰もが立ちたい側に立って利用すべき」という信念について、「ズレの知覚」と「誤知覚」が存在し、「歩行用に立ち止まっている人がいても気にならない」については「誤知覚」が存在することがわかった。

JEL 分類番号： D91, R41

キーワード： エスカレーター， 片側空け， 多元的無知， ズレの知覚， 誤知覚

* なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

^a 立命館大学 人間科学研究科 gr0630sh@ed.ritsumeai.ac.jp

^b 立命館大学 総合心理学部 tmr15047@fc.ritsumeai.ac.jp

1. イントロダクション

1.1. 「エスカレーター片側空け」の現状

日本では、「エスカレーター片側空け（エスカレーターに乗る際に片側に立ち、もう片側は急ぐ人が歩けるようにする）」という暗黙のルールが存在する。しかし、そもそもエスカレーターは歩行を想定して設計されていないことによる事故のリスクや、輸送効率、片麻痺の人が手すりにつかまれないなど一部の人が安心して利用できない、といった様々な問題点がある（元田・宇佐美，2024）。近年、歩行を抑制するための呼びかけやキャンペーンが鉄道各社で行われたり、自治体にて条例が施行されたりしているが、持続した行動変容は見られていない。

1.2. 本研究における「多元的無知」について

多元的無知は、「集団の多くの成員が、自らはある集団規範を受け入れていないにもかかわらず、他者の大半がそれを受け入れていると推測している状況のこと」として定義されてきた（Allport, 1924 ; 村本, 2021, p.496）。このような集団成員の認知的側面に加えて、岩谷・正木・村本（2023）は、「個々の成員が自身の選好に反して、他者が受け入れている（と信じる）規範に従った行動を採用することにより、結果的にその規範が維持される状況」というもう1つの定義を加えた。そこには、「他者の選好の誤推測」というステップと、「規範逸脱に伴う評判低下可能性の誤推測」というステップの、少なくとも2つのステップがあると考えている。また、Mandeville et al. (2016) を参考に「個々の成員が、自己の信念と他の集団成員の信念（推測）との間にズレを知覚している」状態を「ズレの知覚」、「個々の成員が、他の集団成員の信念を誤推測している」状態を「誤知覚」と区別し検討を行っている。本研究においても、「ズレの知覚」と「誤知覚」を区別して検討することとした。

本研究では「エスカレーター片側空け」の信念について、単一の信念でとらえるのではなく、エスカレーターは歩行せずに立ち止まるという「歩行禁止」の信念、エスカレーターは片側を空けずに両側を利用するという「両側利用」の信念、エスカレーターの片側を空けることは集団規範でありそこから逸脱している者に対する違和感という「規範逸脱者への違和感」、の3つの信念があると考え、区別して検討することとした。

1.3. 本研究の目的

もし「エスカレーター片側空け」の信念に多元的無知が存在すると仮定した場合、「エスカレーター片側空け」という集団規範について、自らはそれを好ましいと思っていないにも関わらず、多くの他者がそれを受け入れていると信じるステップがあり、さらに、集団規範から逸脱することに対しても、他者には受け入れられないだろうと信じるステップがある。

その結果、誤って推測された他者の態度に合わせて自分も行動し、さらにこの個人の行動が別の他者に対して影響を与えることで、多元的無知が維持されている状況にあると考えられる。つまり、多元的無知の是正が、集団の行動変容につながる可能性があると言える。よって、本研究では「エスカレーター片側空け」における多元的無知の検証を行いたい。

具体的には、「エスカレーター片側空け」における「歩行禁止」「両側利用」「規範逸脱者への違和感」の信念について、仮説①：自分の信念と推測する他者の信念との間にズレを知覚している「ズレの知覚」が存在する、仮説②：推測する他者の信念が実際の他者の信念（＝全体の自分の信念の平均）と乖離している「誤知覚」が存在する、という2つの仮説について検証を行う。

2. 方法

2.1. 調査対象者

調査対象者は200名（効果量 $r = 0.24$ ，有意水準 $\alpha = 0.05$ を想定）で、大阪府在住の20～39歳を条件とし、Yahoo!クラウドソーシングにて参加者を募集した。Web上で質問に回答してもらい、調査への回答に対して10ポイントを支払った。また、参加者がより真剣に推測をおこなうよう「推測する他者の信念」の質問の成績上位50名に40ポイントを追加で支払うことを提示した。2024年8月13日よりアンケートを掲載し、8月14日に200名の回答が得られたため調査を終了した。

回答者の年齢は、20～24歳が18名、25～29歳が20名、30～34歳が60名、35～39歳が102名であった。性別は、男性91名、女性106名、回答しないが3名であった。

2.2. 質問項目

大問Q1は「自分の信念」を問うもので、【エスカレーターの利用について、あなたの考えにどの程度あてはまるか、一番近いと思われる番号を選んでください】と5件法（「全くそう思わない」を1，から、「とてもそう思う」を5まで）で回答をたずねた。

Q2は、「推測する他者の信念」を問うもので、【エスカレーターの利用について、他の回答者はどんな考えを持っていると思いますか、「全くそう思わない」を1、「とてもそう思う」を5とし、回答者の平均値を推測して小数点1桁までで回答してください】とたずねた。

Q1とQ2それぞれ6つの質問項目があり、「①エスカレーターは、立ち止まって利用すべきだと思う」「②エスカレーターは、歩いて利用しても問題ないと思う」「③エスカレーターは、歩行者のために片側を空けて利用すべきだと思う」「④エスカレーターは、誰もが立ちたい側に立って利用すべきだと思う」「⑤エスカレーターで、歩行用に空けている側に立ち止まっている人がいると違和感がある」「⑥エスカレーターで、歩行用に空けている

側に立ち止まっている人がいても気にならない」とした。①と②（逆転項目）で「歩行禁止」の信念を、③（逆転項目）と④で「両側利用」の信念を、⑤と⑥（逆転項目）で「規範逸脱者への違和感」をたずねる意図で設定した。

Q3 では対象者の属性として、年齢（20～24 歳，25～29 歳，30～34 歳，35～39 歳），性別（男性，女性，回答しない），公共交通機関でのエスカレーター利用頻度（ほぼ利用しない，1 か月に 1 回，1 か月に 2～3 回，1 週間に 1 回，1 週間に 2～4 回，1 週間に 5 回以上），デパート・ショッピングセンターでの利用頻度（ほぼ利用しない，1 か月に数回，1 週間に 1 回以上）をたずねた。

3. 結果

3.1. 「自分の信念」の記述統計量

Q1 でたずねた 6 項目それぞれの回答について、棒グラフで示した（図 1）。

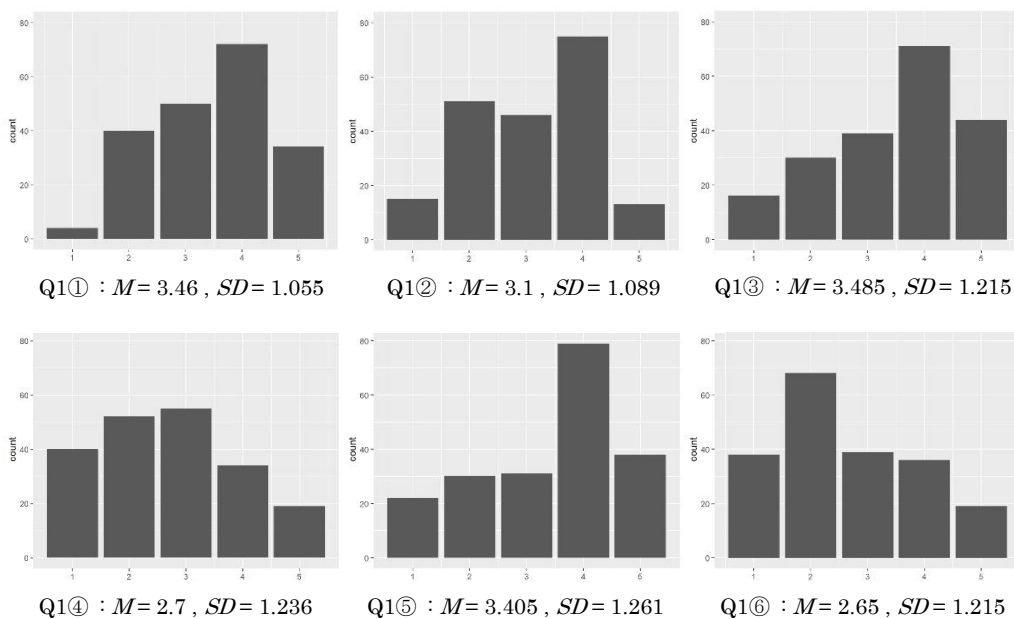


図 1 Q1①～⑥の回答結果棒グラフ

Q1①に対して②を逆転項目として「歩行禁止」信念をたずねる意図があったが、結果的に逆転項目とは言い難い。本研究では信念でまとめず、①～⑥の質問項目それぞれで「ズレの知覚」「誤知覚」について分析を行うこととした。

3.2. 「自分の信念」と「推測する他者の信念」の平均値の比較

①～⑥の質問項目について Q1 と Q2 の平均値の比較を t 検定 ($\alpha = .05$) で行った結果、質問項目①（図 2: $t(397.45) = 3.51, p < .001, d = 0.35$ ）と④（図 3: $t(392.88) = 2.562,$

$p = .011$, $d = 0.26$) で有意な差が認められた。他の質問項目はいずれも有意な差は認められなかった。

3.3. ズレの知覚

「ズレの知覚」は「推測する他者の信念」－「自分の信念」となり、①～⑥の質問項目について、Q2の回答からQ1の回答のポイントを引いて算出した。t検定 ($\alpha = .05$)を行った結果、質問項目① (図4: $t(199) = -4.1413$, $p < .001$, $M = -0.364$, $d = 0.29$) と④ (図5: $t(199) = -3.9748$, $p < .001$, $M = -0.3$, $d = 0.28$) で有意にマイナスな結果が得られた。他の質問項目はいずれも有意な差は認められなかった。このことから、質問項目①と④のみ仮説①が支持された。

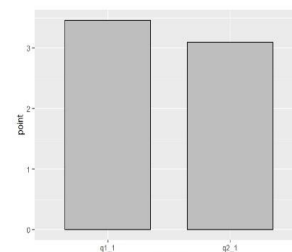


図2 Q1①とQ2①平均の棒グラフ

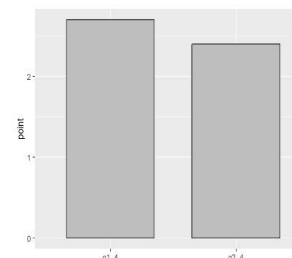


図3 Q1④とQ2④平均の棒グラフ

3.4. 誤知覚

「誤知覚」は「推測する他者の信念」－「全体の自分の信念の平均」となり、①～⑥の質問項目について、Q2の回答からQ1の平均値を引いて算出した。t検定 ($\alpha = .05$)を行った結果、質問項目① (図6: $t(199) = -5.0628$, $p < .001$, $M = -0.364$, $d = 0.36$)、④ (図7: $t(199) = -3.8495$, $p < .001$, $M = -0.3$, $d = 0.27$) そして⑥ (図8: $t(199) = -2.2978$, $p = .023$, $M = -0.1815$, $d = 0.16$) で有意にマイナスな結果が得られた。他の質問項目はいずれも有意な差は認められなかった。このことから、質問項目①、④、⑥において仮説②が支持された。

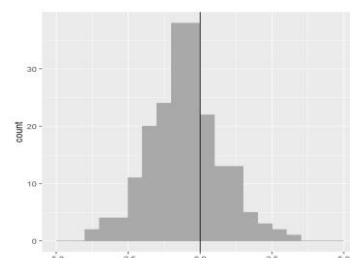


図4 ①の「ズレの知覚」ヒストグラム

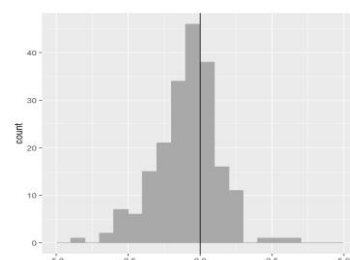


図5 ④の「ズレの知覚」ヒストグラム

4. 考察

本研究では、「エスカレーター片側空け」における信念を問う質問項目①～⑥について、仮説①「ズレの知覚」が存在する、仮説②「誤知覚」が存在する、の検証を行った。質問項目①「エスカレーターは、立ち止まって利用すべきだと思う」と、質問項目④「エスカレーターは誰もが立ちたい側に立って利用すべきだと思う」につ

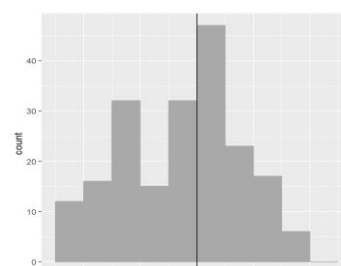


図6 ①の「誤知覚」ヒストグラム

いて、「ズレの知覚」と「誤知覚」ともに存在することがわかった。また、質問項目⑥「エスカレーターで、歩行用に空けている側に立ち止まっている人がいても気にならない」については、「誤知覚」が存在することがわかった。

Q1の項目ごとの回答を見ると、①「立ち止まって利用すべき」と思っているが、②「歩いて利用しても問題ない」とも思っており、③「歩行者のために片側を空けて利用すべき」と⑤「歩行用に空けている側に立ち止まっている人がいると違和感がある」という片側空けの規範意識が強いため、「エスカレーター片側空け」が維持されていることが考えられた。

「立ち止まって利用すべき」と理解している人は多く、「歩かず立ち止まろう」と呼びかけることよりも、「規範」

ととらえている「片側空け」の意識を改めることが行動変容につながる可能性が考えられた。

「立ち止まって利用すべき」「誰もが立ちたい側に立って利用すべき」という考えについて、世間とのズレを知覚している人が、本研究結果をもとに、自分が思っているよりも同じように感じている人が多いことを知り、「誤知覚」を修正することができる。また「歩行用に空けている側に立ち止まっても気にならない」人も思っているより多いということが後押しとなり、自分の信念に従った行動が促される。結果、周囲もその行動を認知することで多元的無知が是正され、全体としての行動変容につながる可能性があると考えられる。

引用文献

Allport, F. H., 1924. *Social psychology*. Boston: Houghton Mifflin.

岩谷舟真, 正木郁太郎, 村本由紀子, 2023. 多元的無知-不人気な規範の維持メカニズム. 東京大学出版会, 東京

Mandeville, A., Halbesleben, J., and Whitman, M., 2016. Misalignment and misperception in preferences to utilize family-friendly benefits: Implications for benefit utilization and work-family conflict. *Personnel Psychology* 69(4), 895-929.

元田良孝, 宇佐美誠史, 2024. エスカレーターのかがく 交通・輸送手段から考える. 成山堂書店, 東京.

村本由紀子, (監修) 子安増生, 丹野義彦, 箱田裕司, 2021. 多元的無知. 現代心理学辞典. 有斐閣, 東京.

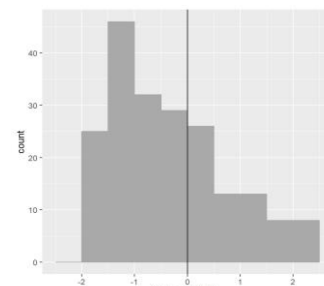


図7 ④の「誤知覚」ヒストグラム

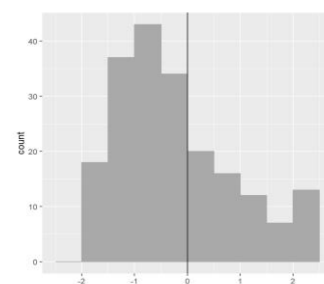


図8 ⑥の「誤知覚」ヒストグラム